CALLによる語彙学習とその効果：*PowerWords*を使って

河　内　千栄子
神　本　忠　光
長　澤　澄　子

1．は　じ　め　に

語彙の重要性は、学習者の能力が上がるに従って増えていく（Skehan, 1986）。言語技能が上達するにつれて、内容を担う語彙の存在が相対的に重要視されてくるのはごく自然のことである。そのような特徴を持つ語彙は、大学の英語教育でどのような扱いを受けているのであろうか。実際、大学でどのような語彙指導を行っているかと尋ねられて、明確に答えられる学部あるいは教師がどの程度いるだろうか。現実には、大学では、中学や高校とは異なり、ほとんど語彙指導らしいものは行われていない（cf. 石川、2004）。行われているとしても、学習者がうまく訳せなかった単語を中心に、意味や用法の解説が行われる程度であろう。そして普通の教材の場合、同じ単語が繰り返し出てくるような構成にはなっていないし、教室外で出くわす可能性は限りなく少ない。大学では4技能の指導や内容を扱う科目が中心で、語彙は常に瑣末的な扱いを受けているといえるだろう。

語彙が習得されるには、同じ単語に何回も出合うことで付随的・意図的に学習されるか、深く処理される必要がある。それぞれの観点から、習得に必要な回数（Kyongho & Nation, 1989; Laufer & Shmueli, 1997; Nagy & Anderson, 1984）や処理する深さ（Craik & Lockhart, 1972; Hulstijn & Laufer, 2001; Laufer & Hulstijn, 2001）について研究が行われている。しかし、先述した状況からみて、大学の一斉授業では語彙習得に結びつく可能性は非常に低いと言わざるを得ない。

それではどうしたらよいのであろうか。その方策のひとつとして、システマテックな個別学習によって語彙力を向上させるという方法が考えられる。これまでの大学の語彙学習は学生任せという状況から脱却し、体系的な語彙学習を推進させる必要がある。語彙の重要性がますます高くなる状況の中、一斉授業という形態ではなくとも、語彙力を増強する機会が提供されるべきであろう。そうすれば、多様な英語能力やニーズを持つ大学生に対しても対処できる。

この論文では、大学での語彙指導の効果的な手段を探る趣旨で、CALL (Computer Assisted Language Learning) による個別学習を取り扱う。まず個別学習の教材に関わる要因を整理し、実際の学習例を紹介し、その効果や意義を議論する。

1.1　個別学習の要因

個別学習と言えば、昨今ではコンピュータが関わるのが一般的である。CALL と呼ばれるその学習形態の特徴は、学習者が自分の能力に合った教材を、自分のペースで学び、自分で評価できることである (Saragi, Nation & Meister, 1978)。どの言語要素も CALL で学べるが、特に語彙は個別化されたほうが効率がよい (Hulstijn, 2001; Iancu, 2000)。

しかし、コンピュータを使えば、それだけで語彙学習が促進される訳ではない (Takefuta, 1999)。どんな語彙をどんなふうに提示するかという二つの問題が、十分に検討されなければならない。特にどんな語彙を学ぶ対象とするかという問題に関しては、語彙は他の言語要素と異なって際限がないので、慎重に行われるべきである。その種類は大別すると、二つある。ひとつは一般的な語彙で、もうひとつは専門的な語彙である。一般的な語彙を、ここでは頻度の観点からみた語彙と捉える。専門的な語彙とは、ESP (English for Specific Purposes) の特徴を持った語彙 (例：Coxhead, 2000; Xue & Nation, 1984) である。どちらの種類の語彙も重要だが、一般的な語彙を学びその後に専門的な語彙を学ぶというのが一般的な習得順序であろう。

頻度を中心に並べられた語彙表への関心は昔から高く、いろいろな特徴を

持った語彙表が存在する（例：Hindmarsh, 1980; Kucera & Francis, 1967; Leech, Rayson, & Wilson, 2001）。その語彙数も*General Service List*（West, 1953）の2000語からThorndike and Lorge（1944）の3万語までと幅広い。また日本人英語学習者向けにも、いくつか作成されている（例：『北大語彙表』（園田、1996）、『JACET基本語4000』（1993）、『JACET 8000』（2004）など）。語彙表は、教材の中の語彙がどの程度難しいのかを判断する材料としてよく使われてきた。

語彙習得の観点からすると、語彙表はあくまで基礎資料である。現代英語の語彙をよく反映し、学習者の特徴も考慮したものを選択する必要がある。最新で膨大なコーパスに基づいて作成されていても、具体的な指導に結びつかない限りただの一覧表でしかない。また一方で、語彙学習が楽しく、しかも学び甲斐があると学習者が感じ、自律的な学習へ導く過程が必要である。つまり、どう学ぶかという過程に学習を促進させる工夫がなされていなければならない。語彙表に並んでいる順序で最初から学んでいくといった学習法が功を奏するはずがない[1]。

まとめると、個別学習の教材には、日本人学習者に配慮した語彙表を使用し、習得に結びつく多様なドリルなどを備えているものが適切といえる。

1.2 *PowerWords*

ここでは、CALL教材*PowerWords*を取り上げる。この教材は、「標準語彙水準12000」（Standard Vocabulary List（SVL））という語彙表を使用している。アルク社（2001：14）は、この語彙表について以下のように説明している。

> この「標準語彙水準12000」では、ネイティブスピーカーの「使用頻度」をベースにしながら、日本人英語学習者にとっての「有用性」「重要性」を考慮して単語の選定を行いました。

---

[1] この点、『JACET8000活用事例集』（大学英語教育学会基本語改定委員会編、2004）に見られるような具体的指導の試みは、今後の語彙指導を大きく発展させる可能性を持っている。

そして、日本における英語教育の現状を踏まえながら、中学生から一般社会人まで、すべての英語学習者が段階を追って効率的に学ぶことができるよう、それらを1000語ずつ、12のレベルに区分しています。

この語彙表には、二つの長所がある。第１点は、12,000語という収録語彙数である。この数字はL2学習者の習得目標語彙数として十分だと考えられる。学者によってこの目標語彙数は若干異なる。例えば、見出し語で8,000語（語族（word family）換算で5,000語）としている学者（Nation, 1990）もいれば、10,000語と考えている学者（Hazenberg & Hulstijn, 1996）もいる。また日本の大学英語教育のリーディングの目標語彙として、9,000～10,000語が挙げられている（大学「一般英語」教育実態調査研究会編、1983）。つまり、12,000語というSVLの語数は、目標とする語彙を含んでいると考えられる。

第２点の長所は、『JACET8000』とかなり高い重複度を示しているということである。中田（2004）は、JACET8000収録語の493語（約6.1%）がJACET8000独自語としている。しかし、それらの語はかなりの部分が派生語なので、「標準語彙水準12000」は『JACET8000』を含んでいると考えて構わない。これは両語彙表がBNC（British National Corpus）を使っているためだと判断できる。その結果、この12,000語という数字は、『JACET 8000』より4,000語多く、目標語彙数を超えているので、より幅広い語彙力の学習者に対応した語彙表と見なすことができる[2]。

「どう」学ぶかという点に関しては、*PowerWords*にはゲーム感覚で学べる工夫がされている。各レベル1000語の単語が20ずつ50ユニットに分けられ、多肢選択式で展開する。画面にはひとつの英単語に対し日本語の定義が３つ示され、学習者は最も適切な定義を選択していく。問違いの多かった単

---

[2] 「標準語彙12000」は、アルクの30年に渡る英語学習教材・書籍の出版活動で蓄積した情報と、約15種類のコーパスを参考にした（アルク、2003）と述べている。蓄積した情報の異なり語数・その範囲（range）や使用したコーパスとの重なり度などに関する情報を明らかにするといっそう評価が高まると考えられる。

語は繰り返し出題されるしくみである（白川、2001）。さらに間違うとその単語はブラックリストに別ファイルとして登録され、いつでも閲覧できる。また、該当する単語や文の発音を聞くことができる。そして、スペルを完成させたり、パズルなどのゲームも組み込まれている。

以上の点から、*PowerWords*は、上に述べた「何」を「どう」学ぶかという二要件を満たしていると考えられる。

2．研　究　目　的

久留米大学にCALLの環境が整備されたのは2003年9月である。そのCALLプログラムの中に、アルク社の*PowerWords*が導入され、これによって、学習者はそれぞれのレベルに応じた語彙学習が可能になった。

先述したように、大学の英語の授業の中で語彙をどのように指導しているかは不明であり、授業での学生の反応を見ても、予習復習に大きな個人差が見られ、大学での語彙学習といえば学生任せの状況がある。加えて、入試形態の多様化に伴い、学生の客観的な語彙力を測定するのが非常に困難になり、まして、大学在学中にどのくらいの語彙が習得されているかについては測定の方法がなかった。

本研究はこのような現状の中、このたび導入されたCALLプログラムの*PowerWords*を使用し、10週間にわたるCALL学習によって、学習者の語彙力がどのように変化したかを調査したものである。本研究では、次の4項目の研究課題について報告する。

（1）10週間における大学生の自主学習によって語彙力は向上したか。
（2）どのレベルの語彙力が最も向上するか。
（3）練習量と向上したレベルの間に関係があるか。
（4）学習者はCALLを使用した課外の*PowerWords*練習について、どのように自主学習に取り組んだか。（アンケート実施）

これらの調査を通して、より信頼性の高い語彙テストの作成、より効果的

なCALL学習、個別学習と一斉授業との有機的な連結など、今後の語彙指導および自律学習につながる提案をしたい。

3．調　査　方　法

3.1　被　験　者

被験者は経済学部1年生43名、法学部1年生63名の計106名である。2004年度（平成16年度）の前期授業において、週1回以上の*PowerWords*による語彙学習を義務づけ、授業の評価の一部（約20%）とした。学習者は*PowerWords*のオリエンテーションで判定テストを受け、判定された自分のレベルから課外の自主学習を10週間行った。

3.2　事前テストおよび事後テスト

アルク社の判定テストはレベル1－12までの語彙学習コースから、学習者がどのレベルから学習を始めるかの目安を提示するとしている。具体的には、レベル5の語彙問題からスタートし、学習者の正誤結果によって次に提示する問題のレベルを上げたり下げたりして、最低21問から最大57問の出題からレベルを決定するとある（アルク社からの報告）。

本研究では、学習者の語彙習得の伸びを測定するために、次に述べる要領で同等テストを二つ作成し、事前および事後テストとして使用した。

テストは、*PowerWords*のレベル1からレベル5までの語彙を対象とした。Nation（1990）のVocabulary Levels Test（VLT）を参考に、下記のような問題を各レベル6問、合計30問（6問×5レベル）作成した。各問は6個の英語の語彙と3個の日本語定義から構成され、その定義に一致する語彙を組み合わせる形式である。

例1

1．business

2．Clock　　＿＿＿＿　壁

3．horse　　＿＿＿＿　馬

4．pencil　　_____ 鉛筆
5．shoe
6．wall

実際の作成手順としては、まず各レベル1,000語から内容語を中心に72語を抽出し、それを半分の36語ずつ（事前テスト用と事後テスト用）に分けた。次にその36語を18語ずつに分け、テスト項目と錯乱肢とした。テスト項目の日本語定義には、*PowerWords*に出てくる定義を使用した。従って、各テストは、合計90項目（18語×5レベル）からなる（資料参照）。2種類のテストはVersion 1およびVersion 2と名前をつけた。

被験者の半分を対象にそれぞれのVersionを事前・事後テストとして使用し、テストのカウンターバランスをとった。事前テストは著者らの担当した5クラスにおいて、CALLのオリエンテーション後に行い、事後テストは10週間後の学期末に行った。テスト時間は両方のテストとも20分程度であった。

3.3　*PowerWords*学習アンケート

*PowerWords*の10週間にわたる語彙学習について、学習者の反応や感想を調べるために事後テストの後にアンケートをとった（詳しくは4.4～4.5参照）。主な質問は、好き嫌いの程度、語彙力向上の実感、練習量の適切さ、目指すレベル、今後の学習継続意欲などである。これによって、学習者が具体的にこのプログラムを使ってどのように語彙学習に取り組んだかを調査し、今後の自主的な語彙学習への方向づけ、授業への取り込みについて検討する。

4．結果と考察

4.1　10週間における大学生の自主学習によって語彙力は向上したか

この質問については、事前テストと事後テストの比較によって調査した。まず、結果を報告する前に、本研究で使用した事前・事後テストの2種類（Version 1 & Version 2）のテストの同等性についての結果を説明しなけ

ればならない。

2種類のテストの同等性を調べるために、被験者のうち63名を対象に二つのVersionの順序を変えて実施した。すなわち被験者33名に対して、事前テストとしてVersion 1、事後テストとしてVersion 2を実施した。また、残りの被験者30名に対して、事前テストとしてVersion 2、事後テストとしてVersion 1を実施した。各レベルの平均点、分散、およびt検定結果は、表1のとおりである。

表1　2種類のテストの同等性（レベル別）

	Level 1		Level 2		Level 3		Level 4		Level 5	
	Ver 1	Ver 2	Ver 1	Ver 2	Ver 1	Ver 2	Ver 1	Ver 2	Ver 1	Ver 2
平 均	17.88	17.63	16.42	16.23	15.24	14.13	11.82	10.33	13.30	11.13
分 散	0.30	0.38	3.69	3.15	5.00	9.91	11.65	13.20	8.16	10.26
t検定	1.68		0.41		1.62		1.67		2.84	
p両側	0.09（ns）		0.68（ns）		0.11（ns）		0.09（ns）		0.006*	

この結果からわかるように、レベル5を除いたレベルはすべてVersion 1とVersion 2の間に有意な差が無く同等レベルと言える[3]。レベル1からレベル4に向かうにつれて平均値が低下し、難度が上がっているのがわかる。このことから、レベル1からレベル4では頻度レベルと学習者の語彙力に逆相関が見られ、語彙リストが妥当であることを示している。すなわち、語彙頻度が低くなればなるほど、学習者にとっては難しくなっていることである。しかし、レベル5については下位のレベル4より平均値が高いことが判明した。考えられる理由としては、次の3点があげられるだろう。

まず第1点は、レベル4と5は他のレベルと較べて分散が大きい。このこ

[3] 厳密に言えば、Hennig（1987）が述べているように、同等テストの条件としては、両テスト間に平均・分散・共分散の3点から差がないことを示す必要がある。その一方で、Henningはその条件を満足させるのは難しいとも説明している（p.81）。本研究では、熟達度を測るのが目的で、重要な決定に使う訳ではないので、平均の差だけを中心に見た。

とは、レベルが上がるに従って学習者個人が知っている語彙に差が出てくる可能性を示唆している。これに関連して第2点として、学習者は、むしろ大学入試などに対応した難易度の高い語彙を習得していると言えるかも知れない[4]。先述したように、VLT形式に従い各レベルは1,000語から18語を抽出したが、これの抽出率は1.8%にすぎない。従って、本テストで使用された項目数ではレベルが上位になると学生の語彙力を十分に測れない可能性を示唆している。もう少し多くの語彙数を抽出してテストすることで、レベルテストの信頼性を高めることができるかもしれない[5]。これらについては今後、更なる検討が必要であろう。

これらの結果から、レベル5を除いたレベルについては、同等性が判明した。従って、以下の結果や議論は、レベル1からレベル4をもとに分析を行い、学習者の語彙習得をみていく。

表2は106名の事前・事後テストの結果である。それぞれの平均、分散、*t*検定、および相関関係の結果を示している。

表2　事前・事後テスト結果

	Level 1		Level 2		Level 3		Level 4		合　計	
	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post
平均	17.70	17.88	16.07	16.24	14.0	14.58	10.62	11.58	58.39	60.28
分散	0.46	0.17	3.81	4.91	11.01	7.41	15.43	12.09	72.32	57.76
*t*検定	2.86		0.99		2.23		3.08		3.71	
*p*両側	0.005*		0.32ns		0.03*		0.002*		0.0003*	
相関	0.38		0.65		0.63		0.64		0.80	

[4] また、難度が高いレベルにあっても外来語として身近な語彙もある。この問題は意外に複雑で、VLTの定義をどうするかという問題も関係してくる。その結果、外来語を省いたVLTや、定義の代わりに説明を使用しているVLTもある（cf. Aizawa, 1999）。

[5] Nation（2001）では各レベルを18項目から30項目に増やしたVLTを掲載している。しかし、この実験では、レベル1～5全体を実施するのにかかる時間を考慮し、各レベル18項目とした。

1～4レベルの合計を見ると、事前テストと事後テストに有意な差がみられ（$t=3.71$、$p<.001$）、10週間におけるCALLの効果があったといえる。事前・事後テストの相関が高く、事前テストで高い得点をとった学習者は、事後テストでも高い得点をとっていることがわかる。ただ、レベルが上位になるにつれ分散が大きくなっているので、個人差が影響していることがうかがえる。

4レベルの語彙合計72語（18語×4レベル）のうち、事前テストの平均は58.39点であり、これは81.09%の正解率にあたる。事後テストの平均は60.28点で、83.72%の正解率にあたる。事前・事後テストによる語彙の伸びを、総合語彙数4,000語（1,000語×4レベル）に当てはめると次のことがわかる。つまり、事前テストでは約3,244語を、事後テストでは3,348語を習得していることを示し、この差は104語となる。単純に言うと10週間に104語習得されたと言える。

4.2　どのレベルの語彙力が最も向上するか

表2からわかるように、レベル1、3およびレベル4において事前テストと事後テストに有意な差が見られた。分散を見ると、レベルが低いほど分散が小さく、上位にいくにしたがって大きくなり、特にレベル4の分散は大きい。上位にいくほど個人差が影響していることがわかる。次のセクションで詳しく述べるが、多くの学生が判定テストではレベル1であり、10週間の練習でレベル1を終了している。このことはレベル1の分散に反映していると思われる。レベル1の事後テストの分散は非常に小さく（$s^2=0.17$）、学習者のほぼ全員が、満点（18点）を獲得していることがわかる。事前・事後の相関関係を見ると、レベル1が最も低く（$r=0.38$）、他のレベルはほぼ同程度の高い相関がみられた。

事前・事後テストでの各レベルでの伸びを、実際の1,000語あたりに換算してみると、レベル1では10語、レベル2では9語、レベル3では32語、レベル4では53語となった。おもしろいことに、レベル4が最も伸びが大きい。実際は、多くの学習者が、レベル1の語彙1,000語を練習していただけにもかかわらず、レベル3やレベル4の語彙も向上していることがわかる。これ

は何を示唆するのであろうか。また、通常なら、レベル1に最も近いレベル2が向上することが考えられるが、レベル2では事前・事後テストに有意な差が見られないのはなぜであろうか。

先述したように、学習者間の語彙力差、これまでの語彙学習経験、および各レベルテストの妥当性など今後の研究が必要であろう。

4.3　練習量と向上したレベルの間に関係があるか

10週間における練習量を見るために、各学習者の練習記録から、練習したユニットの数を合計した。多くは、レベル1を終了しており（50ユニット）、中にはレベル3まで進む学習者も少数見られた。ただ、ほとんどの学習者がレベル1の段階であったため、ここでは学習者のレベルは考慮しないで、単に練習量としてユニット合計数をみた。学習者が10週間に練習したユニット合計数の平均は、61ユニット（最大：203、最小：0）、分散は40.32であった。これらの練習量と事後テストの相関を表3に示す。

表3　練習量と語彙テストの相関関係

Level 1	Level 2	Level 3	Level 4	合計
0.144	0.293	0.197	0.191	0.251

練習量と事後テストの各レベルの得点にはあまり高い相関が見られなかった。ピアスンの検定ではレベル2、3、及び合計では有意といえるが（r=0.195、p=0.05、両側）、これらの結果はあまりに低く、大きな意味がないと見るのが妥当だろう。学習者の練習量の差に、最大で203ユニット、最小で0と大きな違いが見られるように、*PowerWords*に対する取り組みに大きな個人差がみられる。次にアンケートによって、もっと具体的に、学生の*PowerWords*についての感想をみてみよう。

4.4　アンケート結果1

アンケートは全体で12問出題され、9問については次の表4に示すように1～5のスケールより選択させる質問である（1そう思わない；3普通；5

とてもそう思う)。

また、質問10～11については、下記のような適切な練習時間についての質問と、学習者が目指すレベルを選択させた。最後に質問12として自由記述の感想を書かせた。

10. 1回にどれくらいの時間の練習が適切だと思いますか。丸印をつけてください。
    15分、30分、45分、60分、その他（　　分）
11. あなたはどれくらいのレベルを目指したいですか。丸印をつけてください。
    レベル3、レベル4、レベル5、レベル6、レベル7
12. *PowerWords* を使っての感想を、自由に書いてください。

表4　*PowerWords* アンケート

1. *PowerWords* は楽しかったですか。	1	2	3	4	5
2. *PowerWords* をやって語彙力がついたと思いますか。	1	2	3	4	5
3. 1週間で最低「5ユニット」（または30分）の練習量はよかったですか。	1	2	3	4	5
4. 1学期で1レベルをクリアーするという目標設定はよかったですか。	1	2	3	4	5
5. *PowerWords* の音声部分（単語や文）は役に立つと思いますか。	1	2	3	4	5
6. *PowerWords* のブラックリストはよいアイデアだと思いますか。	1	2	3	4	5
7. 今後も自分でさらに次のレベルを目指して勉強したいですか。	1	2	3	4	5
8. 授業の最終成績の中に、*PowerWords* の練習を入れるのはよいことだと思いますか。	1	2	3	4	5
9. *PowerWords* は全体的に見てよい教材だと思いますか。	1	2	3	4	5

表5に質問1～11の基本統計結果を示す。

表5　アンケート結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
平均	3.27	3.52	3.26	3.59	3.85	3.34	3.83	3.61	3.96	39.09	5.04
分散	0.94	0.83	0.95	1.11	1.04	1.13	1.11	1.11	0.82	13.63	1.44
最大	5	5	5	5	5	5	5	5	5	60	7
最小	1	1	1	1	1	1	0	1	2	15	0

平均値をどのように見るかはいろいろあるが、「3.5以上」、すなわち、「普通より良い」と評価したものを中心に見ると、「2．語彙力がついた」、「4．1レベルクリアー」、「5．音声機能」、「7．今後も利用」、「8．成績加味」に関する質問に、より積極的に反応しているのがわかる。*PowerWords*のプログラムには語彙やその語彙が入った文を聞くことができるようになっているが、この音声機能については最も高い評価（$\overline{X}=3.85$）を回答している。これは学習者が音声機能の有効性を認めていることだといえよう。*PowerWords*教材を全体的にどのようにみているかという「9．総合評価」は、最も平均値が高く（$\overline{X}=3.96$）、ほぼ4に近い回答であった。このことから、学習者がこのプログラムを好意的にとらえていることがわかる。

前のセクションで示したように、練習量と語彙の伸びについてあまり大きな関係が見られなかったが、ここでの質問3の「練習量の適切さ」についても最も低い回答であった。質問10の学習者が考える「適切な練習時間」は、平均39分で、最大60分、最小15分と大きな開きがある。ここでも、練習量に関しては個人差が大きく反映しているのがわかる。その意味では、今回やったような、週1回、30分という課題は、10週間で1レベルアップを目指すには必要な練習量だと思われるが、中には負担に感じた学習者がいたのかもしれない。これは、この後での学習者の感想のところで示すが、学習者が定期的な練習をしなかったために、後半に短期間に集中して行ったということにも起因しているようだ。しかし、一週間30分という指定された時間より、適

切だと考える練習時間の平均の方が長いのは興味深いことである。

次に、それぞれの質問の回答がどのように相関しているか調べてみた。また、ユニット合計数も最後の項目に追加し各質問との相関を見た。表6にその結果を示す。

ここでは、相関が妥当だと見られる相関係数0.4前後のものを中心に見てみたい。まず、この「1．練習が楽しかったか」どうかについては、「7．今後もさらに自分で次のレベルを目指して勉強したい」という回答と最も高い相関（r=0.511）を示した。次に「1．練習を楽しい」と思っている学習者は「8．成績に加味」されること（r=0.411）をよいことだと評価している。さらに、「5．音声機能」の有効性を認め、「2．語彙力がつく」という実感をもち、「11．目標レベル」も高いことがうかがえる。

「2．語彙力がついた」と思っている学習者は、「7．今後も利用したい」と回答している（r=0.513)。また、「5．音声機能」も有効だと評価していることがわかる。

「4．レベルを1つクリアーする」ことは、「8．成績に加味される」ことと強い相関（r=0.428）があり、また、「7．今後も利用したい」と考える学

表6　アンケート質問回答の相関関係

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 楽しい	1											
2 語彙力	0.344	1										
3 量適切	0.193	0.038	1									
4 1レベルアップ	0.283	0.303	0.313	1								
5 音声機能	0.363	0.387	0.053	0.172	1							
6 ブラックリスト	0.235	0.052	-0.017	-0.003	0.286	1						
7 今後利用	**0.511**	**0.513**	0.146	0.320	**0.469**	0.247	1					
8 成績加味	**0.411**	0.314	0.208	**0.428**	0.229	0.209	0.351	1				
9 総合評価	0.179	-0.099	0.179	-0.001	-0.213	0.1426	-0.02	0.119	1			
10 練習時間	0.187	0.272	-0.124	0.078	0.292	0.159	0.126	0.176	-0.30	1		
11 目標レベル	0.342	0.318	-0.033	0.001	0.252	0.195	0.367	0.130	0.140	0.277	1	
12 ユニット合計数	0.227	0.213	0.082	0.186	0.077	-0.082	0.238	0.365	0.077	0.134	0.238	1

習者が多いことがわかる。学期中に1レベルアップという課題が成績に加味されることで励みとなっているようだ。

同様に、「7．今後利用したいか」については、「8．成績に加味」されることが強い道具的動機づけになっている。「5．音声機能」とも高い相関（$r=0.469$）があり、この機能が今後の利用につながるようだ。また「11．目標レベル」との相関も見られる。表5で示したように、目標とするレベルは平均してレベル5となっている。事前・事後テストに使用した最も高い語彙レベルを目標としているのがわかる。このことは平均点が18点中13点程度では、そのレベルの語彙を習得しているという意識が学習者にないことを示唆している。

「10．学習者が適切と思う練習時間」や「6．ブラックリスト機能」は、どの質問項目とも関連性が見られなかった。最後の項目の「12．ユニット練習合計数」は、「8．成績に加味」することにやや高い相関が見られた。これは、今後利用したいということ同様に、成績に加味されるかどうかが、この語彙学習の鍵となっていることがわかる。

これらの結果からわかるように、通常の成績に課外でのCALLの自主学習を加えることは、今後の英語の授業のあり方に新しいアプローチを提供すると思われる。

4.5　アンケート結果2

最後の自由記述の質問では、106名の学習者の中から95名が何らかの感想を記述していた。これは全体の約9割に当たり、自由記述の質問にこれほど反応があったことは、大きな意味があるといえる。その中で最も多い感想を順に下記にあげる。

(1)　面白かった、楽しかった、良かった。ハマッタ、夢中になった、使いやすかった。(33名)

この感想の理由を挙げた学習者も多く、それらは、「今までにない学習法であったので」「単語をひたすら書いておぼえるのは大変だがこれは違う」「主な意味のほかにもいろいろな意味があった」「正解してレベルが上にあが

るにつれて」「普通に覚えるより楽しい」「各自のレベルにあわせる」「自分がしたいときに練習できる」などがあった。CALL に対する新鮮さや、若い世代のファミコン感覚がマッチしたのかもしれない。また、自分のレベルや都合に応じた個別学習が良かったと評価している。先のアンケートの質問項目の「1．楽しいか」の問いには、それほど高い評点（$\overline{X}=3.27$）ではないにもかかわらず、この感想が多いのは少し矛盾するかもしれない。むしろ、この感想は、最も評点が高い総合評価（$\overline{X}=3.96$）を反映しているといえる。すなわち、全体的に見ると、*PowerWords* は楽しく、良かった、使いやすかったということであろう。

(2)　単語がわかるようになった、勉強になる、学習できた気分、練習で定着した、単語力がついた、復習になった、繰り返しやって身についた、スペルが緻密になった、つづりを覚えられた。(15名)

学習者は *PowerWords* をやることで、語彙学習ができた、語彙が身についたと認識していることがわかる。中には具体的に、スケルトンや文の穴埋め問題、ゲーム、ブラックリストなどが役に立ったことを挙げている。スペル練習も良い方法だと評価している。これらの具体的な練習を通して、語彙力が向上したと実感したのであろう。

(3)　レベルクリアーしたときに達成感があった、うれしかった、もっと上のレベルを目指したい。(7名)

1レベルをクリアーすることで、達成感を感じ次へのやる気につながっている。達成感という言葉は見られなかったが、じっくり語彙力を伸ばしたい、これからもやっていく、これからも頑張りたいなど、次の語彙学習の意欲につながっている感想も多く見られた。これは、質問項目「7．今後の利用」に高い評点（$\overline{X}=3.83$）があったが、この感想がそれを裏付けることになっている。

(4)　音声が良かった、音声で発音もできた、発音が聞けるからよい。(7名)

数は多くないが、*PowerWords* の音声機能を有効に活用している学生が

いることがわかる。表6では「5．音声機能」と「7．今後の利用」に中程度の相関が見られている（$r=0.47$）。このことから、パソコン上の「読み」に加えて、音声機能で「聞く」、「発音する」ことの練習の有効性を感じている学生は、これから先、自主的に語彙学習を続けていく傾向があるといえる。

(5)　キーボードの練習になった、パソコンの使い方も同時に学ぶことができた。（5名）

本調査は、大学1年生が対象であるために、まだ、キーボードやパソコンに不慣れな学生が多くいた。そのため、入学早々に、このCALL学習を実施したために、パスワードの意味や、*PowerWords*のプログラムまでのアクセスの仕方など知らない学生がたくさんいて、最初の2～3週間は慣れるまでに混乱したり、失敗したようである。私たちが与えた課題が、キーボードやパソコンに慣れさせたというのは、10週間の練習の副産物であろうが、それはそれで意味があることといえる。

次に、*PowerWords*に対して下記のような否定的な回答も見られた。

(6)　長くやると目が疲れる。（7名）、

どれくらい長くやったか具体的な時間は書かれていないが、長時間すると目が疲れるのは当然であろう。練習時間については今後の課題である。ただアンケートでは、適切な練習時間としての学習者の回答は平均39分という結果であった。ある学習者は、感想の中で、「集中力がないので20分が限度」と書いている。また、前半にサボったので後半、集中的にやったという学生の声を聞いたし、実際に練習記録には、後半に練習が集中していた学生が多く見られた。この感想は、計画的な、また規則的な練習ができなかったために、無理をしたせいなのかもしれない。今後はクラスでの定期的な練習への呼びかけ及び何らかの工夫が必要であろう。

(7)　単語が多すぎる、長すぎる、きつい、長すぎるので20回でクリアーするくらいが良い。（6名）

学習者の中には、１レベルをクリアーするのがかなり困難であった者もいたようだ。おそらく語彙力がない学習者は、スムーズに進まないためにこのような感想を持つと思われる。

(8)　ブラックリストに簡単な単語が入ってショックだった、単語は繰り返して覚えるものなのに間違えるとブラックリストに入るのは良くない、ブラックリストで何回も出てきて、わかっているのに頭が混乱した時もあった。（３人）

ブラックリストの機能を評価する学習者がいる一方、ブラックリストに入ることがストレスに感じる学習者もいた。同じ単語に出会う回数が多いことは語彙習得の促進要因であり、特に学習者が誤った単語を定期的に練習させるのはCALLならではの機能である。心理的プレッシャーに対しては、ブラックリストが評価とは無関係であること、おのおの学習者の苦手な単語のアシスタント的な役割であることを周知させれば、軽減されるだろう。

以下の感想は、それぞれ１つずつみられた。

(9)　作業が単調なので、長時間やり続けるのはつらい。
(10)　難しくなっていくうちに、あまり面白くなくなっていくし、あんまり学んだ単語を覚えていないような気がする。
(11)　最初のほうはあまり簡単すぎてやる気が出ない。
(12)　進行度を成績に入れられるのはつらい、もっと授業に関連したソフトをやりたかった。

上記の中で、感想(10)は注目すべきであろう。回答者はまじめな学生で、練習量も89ユニットをやりレベル３まで進んでいる。長期にわたって*PowerWords*で語彙学習しても、本当にそれまでの語彙が習得されたのかという疑問を提起している。同じ練習形式で長期間かけてやると、感想(2)で見たような、語彙が身についたという実感がうすくなり、(9)の感想のように、単調さが目についてくるのかもしれない。

また(11)の感想は、*PowerWords*の判定テストの妥当性とも関係している。判定テストは開始時期の語彙力を診断する目的で、一回しか受けられないようになっている。しかし、出題形式やコンピュータそのものの操作に不慣れなため、実際の能力を測れていない可能性もある。実際に本研究では、かなりの数の学生が判定テストではレベル1の判定を受けているのに対して、事前語彙テストではそのレベルは習得していると考えてよい結果を示している。このような不一致が見られると、学習者は課題そのものに不満を覚え、また学習効果もあまり望めないかもしれない。能力と一致した適正なレベルで、より効果が高い語彙学習が行えるように、*PowerWords*の管理者が必要に応じて学習するレベルを調整できたり、学習者に判定テストを再受験できるように操作できる柔軟性が望まれる。さらに判定テストを複数回受験できれば、熟達度テストとしても使える可能性がある。

今後は、このプログラムを継続して学習させるには、動機づけをはじめ、学んだ語彙が効果的に使用されるような、実際のコミュニケーションの場の提供や、クラスの授業への有機的な組み込み、リーディングで語彙習得が実感できるような環境整備（たとえば語彙レベルに基づく本の充実）が必要であろう。

要望としては、「パソコンがいっぱいで使用できない、パソコンを増やしてほしい（4名）」「学外からもアクセス可能にしてほしい。（2名）」「自分が選んだ語彙を別のリストにして閲覧できるようにしてほしい（1名）」などがあった。

5．結論と今後の課題

大学での語彙指導は中学校・高校と違って、目標設定が明確でないため、それに続くべき指導方法などが十分に議論されてこなかった。教えるためには、目標が明確でないことには始まらない。目標を設定した上で、その目標をどう達成するかという方法を考えなければならない。この論文は、大学での語彙指導のひとつの試みとしてCALL教材による個別学習の可能性を探り、今後の語彙学習の1つの方向を示した。

本論では、これまで行われてこなかった大学生のCALL学習による語彙習得についてパイロット的ではあるが、10週間における個別学習による量的変化および学生のCALL語彙学習の取り組みを調査した。10週間という限られた期間であり、自主学習という拘束力が弱い条件下であったが、*PowerWords*による語彙学習の有意な効果がみられた。

VLT形式の語彙テストでは、レベルが1からレベル4までは、レベルが上がるにつれて、学習者の得点が減少し、テストの妥当性が見られたが、レベル5では下位のレベル4より高い得点が示された。また、事前・事後テストの増加率が難度の高い語彙レベルのほうにより大きいことがわかった。今後の課題は、テスト項目の追加や、テスト形式の工夫などによってより信頼性の高いテストを作成することである。また、上位学習者がいるために、さらに上のレベル6やレベル7のテストを実施する必要もある。

本研究では、遅延再テストは行っていない。厳密に言うと、学習者がクリアーしたレベルが、確実に習得されたかをある程度の時間を置いて再調査しなければならない。しかし実験後、被験者の約半分はクラス再編成され、追跡調査は困難だった。一方、本研究の被験者の約50人が*PowerWords*を使用し語彙学習を続けている。従って、本研究よりさらに長い合計20週間の個別学習についての効果はこれから分析する予定である。

アンケートでは興味深い発見がたくさん見られた。*PowerWords*を使用したCALL学習では好き嫌いがはっきりしていることがわかる。ただ、全体的には、多くの学生がこのプログラムによる練習を好意的に評価し、新しい語彙学習方法として積極的に受け入れていることが確認された。今後の問題としては、継続して長期的に自主学習する際に、慣れや単調さから語彙習得の実感が薄れる可能性があり、何らかの対策をとらねばならないことである。

この問題は、語彙学習だけを切り離して向上させるのは自ずと限界があることを示唆している。語彙指導は外国語カリキュラム全体の中に体系的に組み込まなければならない。加えて、大学での専門教育になると専門用語が必要になってくるが、そこに行きつくまでの語彙指導をどのように体系化するかは、今後、早急に取り組まねばならない課題である。

参 考 文 献

Aizawa, K. (1998). Developing a vocabulary size test for Japanese EFL learners. *Annual Review of English Education in Japan, 9*, 75-85.

Coxhead, A. (2000). A new academic word list. *TESOL Quarterly, 34*, 213-238.

Craik, F. I. M. & Lockhart, R. S. (1972). Levels of processing: A framework for memory research. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior, 11*, 671-684

Hazenberg, S. & Hulstijn, J. H. (1996). Defining a minimal receptive second-language vocabulary for non-native university students: An empirical investigation. *Applied Linguistics, 7*, 145-163.

Henning, G. (1987). *A guide to language testing*. Cambridge: Newbury House.

Hindmarsh, R. (1980). *Cambridge English lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hulstijn, J. (2001). Intentional and incidental vocabulary learning: A reappraisal of elaboration, rehearsal and automaticity. In P. Robinson (Ed.), *Cognition and second language instruction* (pp. 258-286). Cambridge: Cambridge University Press.

Hulstijn, J. H. & Laufer, B. (2001). Some empirical evidence for the involvement load hypothesis in vocabulary acquisition. *Language Learning, 51*, 539-558.

Iancu, M. A. (2000). Implementing fluency first activities in an intermediate-level EAP reading class. *TESOL Journal, 9(2)*, 11-16.

Kucera, H. & Francis, W. N. (1967). *Computational analysis of present-day American English*. Providence, RI: Brown University Press.

Kyongho, H. & Nation, P. (1989). Reducing the vocabulary load and

encouraging vocabulary learning through reading newspapers. *Reading in a Foreign Language, 6(1)*, 323-335.

Laufer, B. & Hulstijn, J. H. (2001). Incidental vocabulary acquisition in a second language: The construct of task-induced involvement. *Applied Linguistics, 22*, 1-26.

Laufer, B. & Shmueli, K. (1997). Memorizing new words: Does teaching have anything to do with it? *RELC Journal, 28*, 89-108.

Leech, G., Rayson, P. & Wilson, A. (Eds.). (2001). *Word frequencies in written and spoken English*. Harlow: Longman.

Nagy, W. E. & Anderson, R. C. (1984). How many words are there in printed school English? *Reading Research Quarterly, 19*, 304-330.

Nation, P. (1990). *Teaching and learning vocabulary*. Boston: Heinle & Heinle.

Nation, P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Saragi, T., Nation, P. & Meister, G. F. (1978). Vocabulary learning and reading. *System, 6*, 72-78.

Skehan, P. (1986). The role of foreign language aptitude in a model of school learning. *Language Testing, 3(2)*, 188-221.

Takefuta, J. (1999). Three types of CALL courseware developed for teaching vocabulary to Japanese college students. *JACET Bulletin, 30*, 103-117.

Thorndike, E. L. & Lorge, I. (1944). *The teacher's word book of 30,000 words*. New York: Teachers College, Columbia University.

West, M. (1953). *A general service list of English words: With semantic frequencies and a supplementary word-list for the writing of popular science and technology*. London: Longmans.

Xue, G.-Y. & Nation, P. (1984). A university word list. *Language Learning and Communication, 3*, 215-229.

アルク（2001）.『CD-ROM PowerWords Guide book』東京: アルク。

アルク（2003）.『学辞郎』東京: アルク。

石川慎一郎（2004）.「JACET8000および各種教育ソフトウェアを用いた大学での語彙指導」大学英語教育基本語改定委員会（編）『JACET8000活用事例集』(pp. 7-13) 東京: 大学英語教育学会。

白川　正（2001）.「PowerWordsと標準語彙表」『英語教育』50(1): 58-59。

園田勝栄（1996）.『大学生用英語語彙表のために基礎的研究』言語文化部研究報告叢書7　札幌: 北海道大学。

大学「一般英語」教育実態調査研究会（編）（1983）.『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究（Ⅰ）: 教員の立場』(文部省科学研究補助金研究報告書)。

大学英語教育学会（編）（2003）.『JACET8000活用事例集』東京: 大学英語教育学会。

大学英語教育学会教材研究委員会（編）（1993）.『JACET 基本語4000』東京: 大学英語教育学会。

大学英語教育学会基本語改定委員会（編）（2004）.『JACET8000』東京: 大学英語教育学会。

中田達也（2004）.「日本人学習者のための教育語彙表：JACET8000とSVL 12000の比較」大学英語教育学会基本語改定委員会（編）『JACET8000活用事例集』(pp. 58-59) 東京: 大学英語教育学会。

資料

学籍番号：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

名　　前：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1,000語レベル＿＿＿＿＿/18
2,000語レベル＿＿＿＿＿/18
3,000語レベル＿＿＿＿＿/18
4,000語レベル＿＿＿＿＿/18
5,000語レベル＿＿＿＿＿/18

合計：＿＿＿＿＿/90

Version 1

このテストは、語彙力を測るテストです。1～6の単語を見て、右側の日本語に相当する英語を選び、下線部分にその番号を書きなさい。下に、例題があります。

1　business
2　clock　　＿＿＿　壁
3　horse　　＿＿＿　馬
4　pencil　　＿＿＿　鉛筆
5　shoe
6　wall

答えは、次のように記入します。

1　business
2　clock　　6　壁
3　horse　　3　馬
4　pencil　　4　鉛筆
5　shoe
6　wall

1～6には関係ない単語も含まれています。上の例では、business、clock、shoeがそれに当たります。

それでは始めて下さい。

The 1,000 word level

1	country		
2	frog	_____	それら
3	one	_____	ひとつ
4	quarter	_____	国；田舎
5	rope		
6	those		

1	brother		
2	car	_____	父
3	father	_____	兄弟
4	fool	_____	ばか者
5	glove		
6	jam		

1	island		
2	July	_____	島
3	mistake	_____	西
4	table	_____	動物園
5	west		
6	zoo		

1	boot		
2	chair	_____	椅子
3	chalk	_____	長靴
4	its	_____	贈り物
5	present		
6	snake		

1	arrive		
2	become	_____	聴く
3	climb	_____	招待する
4	invite	_____	到着する
5	listen		
6	send		

1	dry		
2	either	_____	良い
3	good	_____	乾いた
4	last	_____	どちらか一方の
5	straight		
6	warm		

The 2,000 word level

1 bone
2 bookshop _____ 骨
3 pearl _____ 主題
4 photographer _____ 写真家
5 shrimp
6 subject

1 flag
2 heat _____ 難問
3 nut _____ 木の実
4 puzzle _____ 力；強さ
5 result
6 strength

1 bean
2 dentist _____ 歯医者
3 nation _____ 物；目的
4 object _____ 国家；国民
5 path
6 university

1 bar
2 board _____ 板
3 branch _____ 試験
4 examination _____ 役人
5 officer
6 passenger

1 complain
2 cross _____ 依存する
3 depend _____ 不満を漏らす
4 follow _____ 後について行く
5 hang
6 include

1 deaf
2 exciting _____ ついに
3 finally _____ 聴覚障害の
4 highly _____ とても小さい
5 tight
6 tiny

The 3,000 word level

1 bathtub
2 fountain _____ 状況
3 growth _____ 浴槽
4 parking _____ 支持者
5 situation
6 supporter

1 horizon
2 marriage _____ 関係
3 opportunity _____ 機会
4 reality _____ 結婚
5 relationship
6 sketch

1 daytime
2 goods _____ 詩
3 harmony _____ 商品
4 poetry _____ 望遠鏡
5 salesman
6 telescope

1 bless
2 confirm _____ 後悔する
3 offend _____ 分割する
4 regret _____ 感情を害する
5 rub
6 split

1 consider
2 entertain _____ 楽しませる
3 reflect _____ よく考える
4 relate _____ 大声をあげる
5 wrap
6 yell

1 casual
2 closely _____ 密接に
3 global _____ 全世界の
4 obvious _____ 柔らかく
5 softly
6 wealthy

The 4,000 word level

1 cabinet
2 echo _____ 聖人
3 ignorance _____ 無知
4 resolution _____ 飾り棚
5 saint
6 scent

1 amateur
2 amusement _____ 手順
3 inn _____ 楽しみ
4 mess _____ しろうと
5 nap
6 procedure

1 crowd
2 discipline _____ 延長
3 extension _____ 領土
4 heater _____ 暖房器
5 session
6 territory

1 estimate
2 fold _____ つかむ
3 multiply _____ 見積もる
4 postpone _____ 折りたたむ
5 seize
6 weave

1	advanced		
2	critical	_____	上級の
3	ignorant	_____	決定的な
4	necessarily	_____	若々しい
5	thickly		
6	youthful		

1	bracelet		
2	freshman	_____	腕輪
3	laboratory	_____	真昼
4	loneliness	_____	新入生
5	midday		
6	turtle		

1	definite		
2	mutual	_____	時折の
3	nasty	_____	明確な
4	occasional	_____	意地悪な
5	shocked		
6	shortly		

1	annoy		
2	darken	_____	叫ぶ
3	dissolve	_____	悩ます
4	entitle	_____	暗くする
5	exclaim		
6	hike		

The 5,000 word level

1	dolphin		
2	exposure	_____	意義
3	opponent	_____	疑い
4	pointer	_____	指し示す人（物）
5	significance		
6	suspicion		

1	delightful		
2	heavenly	_____	高潔な
3	honorable	_____	満足な
4	satisfactory	_____	天国のように
5	situated		
6	trendy		

1	concept		
2	donkey	_____	概念
3	hardness	_____	混合
4	missile	_____	堅いこと
5	mixture		
6	symphony		

1	developed		
2	forgetful	_____	現在
3	moist	_____	湿った
4	presently	_____	発展した
5	severely		
6	surprisingly		

学籍番号：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

名　　前：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1,000語レベル＿＿＿＿＿/18
2,000語レベル＿＿＿＿＿/18
3,000語レベル＿＿＿＿＿/18
4,000語レベル＿＿＿＿＿/18
5,000語レベル＿＿＿＿＿/18

合計：＿＿＿＿＿/90

Version 2

このテストは、語彙力を測るテストです。1～6の単語を見て、右側の日本語に相当する英語を選び、下線部分にその番号を書きなさい。下に、例題があります。

1　business
2　clock　＿＿＿　壁
3　horse　＿＿＿　馬
4　pencil　＿＿＿　鉛筆
5　shoe
6　wall

答えは、次のように記入します。

1　business
2　clock　　6　　壁
3　horse　　3　　馬
4　pencil　　4　　鉛筆
5　shoe
6　wall

1～6には関係ない単語も含まれています。上の例では、business、clock、shoeがそれに当たります。

それでは始めてください。

The 1,000 word level

1	church		
2	earth	_____	教会
3	her	_____	公園
4	hospital	_____	地球
5	park		
6	towel		

1	arm		
2	chance	_____	腕
3	line	_____	一対
4	mind	_____	見込み
5	pair		
6	someone		

1	driver		
2	list	_____	戦争
3	mother	_____	一覧表
4	mouth	_____	運転手
5	war		
6	window		

1	body		
2	group	_____	記憶
3	history	_____	七つ
4	memory	_____	歴史
5	moon		
6	seven		

1	bake		
2	close	_____	輝く
3	receive	_____	閉じる
4	shine	_____	止める
5	stop		
6	touch		

1	friendly		
2	heavy	_____	重い
3	important	_____	親切な
4	of	_____	～して以来
5	since		
6	sorry		

The 2,000 word level

1 degree
2 direction _____ 税金
3 sunset _____ 程度
4 score _____ 日没
5 tax
6 thought

1 coal
2 purple _____ 石炭
3 rank _____ 読者
4 reader _____ あなた自身
5 underwear
6 yourself

1 candle
2 cheek _____ 飛行
3 flight _____ うわさ
4 root _____ ロウソク
5 rumor
6 throat

1 companion
2 dentist _____ 記録
3 effort _____ 努力
4 record _____ 仲間
5 sentence
6 stream

1 apply
2 arrange _____ 勝つ
3 assist _____ 申し込む
4 feed _____ 餌を与える
5 praise
6 win

1 aside
2 aware _____ 神聖な
3 empty _____ 最も小さい
4 holy _____ 中身のない
5 least
6 somewhere

The 3,000 word level

1 angle
2 carrot _____ 角度
3 goat _____ 保険
4 insurance _____ ヤギ
5 passion
6 temperature

1 carpet
2 chimney _____ 煙突
3 planning _____ 賃金
4 sample _____ 立案
5 sunrise
6 wage

1 baking
2 clothing _____ 装置
3 device _____ 在庫品
4 lane _____ 教えること
5 stock
6 teaching

1 attract
2 deserve _____ 雇う
3 employ _____ 口論する
4 quarrel _____ すすり泣く
5 represent
6 weep

1 argue
2 concern _____ 議論する
3 explore _____ 無視する
4 ignore _____ 輸入する
5 import
6 rely

1 commercial
2 due _____ 完全に
3 horrible _____ 不要の
4 needless _____ 当然支払われるべき
5 suitable
6 totally

The 4,000 word level

1 bodyguard
2 draft _____ 医師
3 guidance _____ 下書き
4 institute _____ 少数（派）
5 minority
6 physician

1 basin
2 determination _____ 設立
3 dragon _____ 洗面器
4 establishment _____ フクロウ
5 mode
6 owl

1 corporation
2 estate _____ 慈悲
3 frost _____ 物質
4 mercy _____ 冒険的な行動
5 substance
6 venture

1 apt
2 fade _____ しかる
3 insult _____ 散乱する
4 resemble _____ 侮辱する
5 scatter
6 scold

1 aged
2 brief _____ 奇妙な
3 endless _____ その間に
4 meanwhile _____ 同情的な
5 peculiar
6 sympathetic

1 auto
2 conviction _____ 信念
3 frequency _____ 難民
4 refugee _____ 教師
5 schoolmaster
6 thinker

1 despite
2 modest _____ 率直に
3 openly _____ 控えめな
4 outstanding _____ とてもひどい
5 thorough
6 wicked

1 dip
2 evaluate _____ 制限する
3 halt _____ 評価する
4 overflow _____ ちょっとつける
5 prosper
6 restrict

The 5,000 word level

1 commitment
2 immigrant _____ 移民
3 moss _____ 苔（こけ）
4 reservation _____ あばら骨
5 rib
6 viewpoint

1 consumption
2 hedge _____ 機知
3 housekeeper _____ 家政婦
4 novelist _____ 小説家
5 obligation
6 wit

1 bravely
2 finely _____ 勇敢に
3 primarily _____ 立派に
4 rising _____ 上昇する
5 terrific
6 unpleasant

1 brutal
2 literally _____ まれな
3 medieval _____ 残忍な
4 regardless _____ 無頓着な
5 talented
6 uncommon